

## 博報財団 第13回「博報日本研究フェローシップ」成果報告書

## I. 研究成果概要

氏名(フリガナ)	大森恭子(オオモリ キョウコ)
在住国名	アメリカ合衆国
所属・役職	ハミルトン大学東アジア言語文学学部 日本学科 准教授
招聘回(招聘研究期間)	第13回(2019年3月5日～2019年8月28日)
受入機関	立命館大学
招聘研究テーマ	声のテクノロジー:近現代日本における無声映画 弁士説明 ラジオ・ストーリーテリング
研究目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>本研究は、映画草創期から戦後、中でも特に1920～30年代のサイレントからトーキーへの過渡期において、「映像・テキスト・声」が交差する場としてのテクノロジーを、世界規模の近代化における「感覚史」の重要な一章として捉える本の執筆を目的とする。具体的には、当時の映画を中心とし、しかし映画作品を分析するのではなく、それをとりまく音として、以下のような点を考察している:活動写真弁士(略称 弁士)が映画館で行なっていた「説明」;弁士説明台本;弁士の執筆したエッセイや文学作品;当時の様々な雑誌や新聞、そしてラジオ番組に登場した、弁士説明の一種の再現とも言える「映画物語」、映画館のパンフレット(特に『武蔵野ウイークリー』);弁士の「声」についての当時の言説(雑誌・新聞など)</li> <li>このピックについては、これまでも調査・研究・執筆を進めてきたが、今回はアーカイブ、他の研究者、現代の弁士などとの交流でさらなる調査研究を進め、重要な資料を入手して本の執筆を進めることを目標とした。</li> </ul>

## 研究成果概要

## 1. どのように研究を進めたか(具体的に)

立命館大学教授である中川成美先生に受け入れていただき、下記のような調査・活動を、全うすることができた。

- 「音風景」のプロジェクトとして調査・研究を進めてきたが、今回は下記のアーカイブなどでさらに貴重な資料を入手し、本の執筆を進めた。

例)立命館大学(平井図書館・文献資料室・修学館リサーチライブラリー・ARC・国際平和ミュージアム)、国立国会図書館、国立映画アーカイブ、新宿区立図書館、新宿武蔵野館、立教大学大衆文化研究センター(旧江戸川乱歩邸)、おもちゃ映画ミュージアム、京都府京都文化博物館。また、立命館大学図書館レファレンスデスクのインターライブラリー・ローンを通して書籍の取り寄せ、複写を多数依頼できたため、当初予定していた他のアーカイブ数カ所は、その場に出向かずに資料入手が可能となった。

- 具体的な資料名としては、比較的入手が容易なものや以前に調査したりしたもの(『読売新聞』『都新聞』『キネマ旬報』『新青年』など)に加えて、次のようなものがある:初期映画雑誌(例:『キネマ』、『映画新潮』、『映画と演芸』『映画時代』『活動評論』など)、無声からトーキーへの過渡期についての詳しい資料(特に、映画『黎明』、『ふるさと』、『マダムと女房』)、映画のシナリオや弁士の説明台本、『武蔵野ウイークリー』など)その他、様々な資料の現物、あるいはマイクロフィッシュや複製版などを詳しく調査した。特に、映画作りの文法がテクノロジーの発達とともに変化してゆき、映画はどんな風に物語を組み立ててゆくかという試行錯誤をコンテキストとして、スクリーンに映る映像と字幕(タイトル)や弁士の説明との関係について議論されたものを集め、分析を行った。これまでに弁士関連の音声資料や、弁士がどんなスタイルでどんな説明をしたかというようなエッセイ記事などは読み込んでいたが、映画という媒体に関するディスコース全体の中で、映画、字幕、弁士、(また、私の専門外ではあるが映画音楽も)、映画館における映画体験についての議論が構築されているプロセスをより集中的に見ていった。それ以外に、『社会と教化』などの雑誌からは、映画と直接関係はないが教育者たちが弁士に望んだ役割などを垣間見せる記事を丹念に読み捨作業を進めた。

- 海外で日本研究を行う際に起こりがちなギャップを埋めるべく、日本国内での他の研究者との交流や意見交換、学会参加、シンポジウムでの発表、アーカイブやミュージアムでの集まり、弁士のイベントなどに積極的に参加した。現代の弁士の方々ともって話を聞くなどした。

例)東京外国語大学におけるシンポジウムでの発表(Symposium: Directions in Japanese Film Studies, 5/18)、おもちゃ映画ミュージアムでの様々な上映会・トーク・個人ツアーへの参加(例:ストップアニメーション、依田義賢、京都ニュースの保存計画、光学玩具、太田館長との面談、3-8月)、Isolde Standish SOAS名誉教授の講演出席とディスカッション(6月)、Ritsumeikan Gender Studies Group主催のドキュメンタリー映画上映会出席・プロデューサーや出演者とのQ&A(6月)、「日本映画の父・牧野省三」『雄呂血』上映会とトーク出席(6月)、祇園天幕映画祭参加(7月)、Art Research Center Day conference デジタルアーカイブの構築について(8月)、『十字路』上映会とトークイベント参加(8月)など。他に、立命館大学、早稲田大学、東京外国語大学、京都大学の研究者たちとのディスカッションを行うことができた。その他、在野の研究者やサイレント映画時代を知る方々、京都の映画産業に深く携わってきた方々と情報交換をすることができたことも非常に大きい。

- 立命館大学メディアラボの使用許可を得て、本と並行進行させているデジタル・アーカイブ(弁士)の作業も継続した。(これについても、VRモデルとしてデザインした新宿武蔵野館を、8月の報告会で披露した。)

## 2. 研究によりどのような知見が得られたか(具体的に)

まず初めに、執筆中の本のタイトル(仮題、英語)を挙げたい:“Culture of Voice: Manifestation of Voice in Cinema, Records, Radio, and Print”(alt.,“Benshi and Soundscape of Modernity: Manifestation of Voice in Cinema, Phonograph, Radio, and Print”)(「活動写真弁士と近代の音風景:映画、レコード、ラジオ、活字にたちあられる声」)

サバティカルの当初の予定では、前半(2018年9月~2019年2月)では既に収集した資料をもとにアメリカにて本の執筆を進め、後半(2019年3月~8月)で、執筆中に気づいた資料の穴を埋めるべく、最後の調査をするというものであった。しかし、後半のフェローシップ期間中の調査によって、幾つかの章では資料の量と内容が拡張・変化した。(詳細は23日の報告会と最終報告書で説明済み。)これは、アーカイブで特に雑誌新聞などの古い資料に丹念にあたる時間を得たことが大きい。現代の弁士、在野研究者の方々と意見交換の成果でもある。この本は夢声一人についての研究書ではないが、様々なメディアにおいて同時進行で効果的なナラティブを模索した好例として、夢声を中心に据えている。そのため本来は、徳川夢声が活躍した1910~1970年代と重なる時期全体を網羅するように各章を書き進めていたが、今回入手済みの資料を最終確認して使用方法を再検討したところ、取捨選択しても本2冊分の分量になってしまうと判断。それぞれの貴重な資料の紹介分析と議論が中途半端に終わるよりは、今回出版予定分は、特に重要である1920~30年代を中心にした研究書が妥当であるという結論に落ち着いた。

焦点とする1920~30年代は、サイレント映画からトーキーへの移行期であると一般的に言われるが、そのあゆみは単純ではない。当然のことながら、一直線に進歩・発展していったのではなく、技術的にも語りのスタイル的にも、複数の試みが同時進行で行われていた。エディソンが蓄音機、そして映画を発明した19世紀末当初、すでに映像と音を合わせるという目標を掲げていたことから分かる通り、無声映画と音の関係は、その時その時の技術をどう使うかについての議論点が続いた。近代のテクノロジーとしての映画は、速やかにグローバルな広がりを見せたが、同時に各地の文化などの違いによって、その需要・適応のスタイルが異なった。日本では、各映画館で弁士と音楽隊またはオーケストラが生弁士説明と伴奏音楽をつけたが、それらについても雑誌・新聞などで、映画の音・声とはなんぞや、という議論が盛んに行われた。ここ30年ほど盛んになったサウンドスタディーズの研究の先鞭をつけるような議論が、一世紀前になされていることが、当時の雑誌記事などでわかった。また、どんな弁士説明のスタイルが良いのか、そのためにはどんな説明台本を用意すべきか、台本を用意するためには外国映画の字幕を邦訳するときどんな点に留意すべきかなど、翻訳の問題も議論されている。また、当時の作家たちも、弁士の説明によって映画への理解が変わり、さらにはサイレントからトーキーへの過渡期には、映画に録音された音声とともに聞こえる弁士のライブの説明といった、幾層にも重なるナラティブ(語り)に触発されていることもわかる。さらに、「映画鑑賞」は映画館にとどまらず、ラジオ放送の「映画物語」、弁士説明のレコード、弁士説明の雑誌付録を音読するファンなど、様々な音の広がりを見せてゆくことが、今回の調査で確認された。

## 3. 研究成果(予定を含む)

○論文(題目、掲載誌、発行者、掲載月、内容の概略(200字以内))

・論文「乱歩・声・モダニティーの音風景」(『江戸川乱歩新世紀-越境する探偵小説』東京:ひつじ書房 2019。2月末に出版済)

み。) 作家江戸川乱歩はこれまで、視覚と結びつけた議論・分析がなされてきたが、本論文では、乱歩自身の「音」に対する考察をした後、乱歩作品中の「音」や「声」が近代社会を背景に操作されて身体と遊離した存在としてどのように犯罪小説に使われているかを考察した。旧乱歩邸の貴重な資料を手に取り、本の余白の書き込みなども調査した結果であるため、それについても少し触れている。

・現在、本の原稿に集中しているが、戦時中、占領期の題材やデジタルアーカイブについては、記事として出版することを検討中。

○口頭発表(題目、イベントの名称、日・場所、内容の概略(200字以内))

“A Digital Recreation of Silent Film Experience: Benshi, Movie Theaters, and Audience in Early Twentieth-Century Japan,” Symposium: Directions in Japanese Film Studies, 2019年5月18日、東京外国語大学。20世紀初頭の弁士説明という、映画館での録音が残っていないために泡沫のように消えた声の芸を、他の歴史的資料を使って再構築する試みとしてのデジタルヒューマニティーズプロジェクトを題材に発表。

“From Noise to Music: The Meaning of Sound in Japan’s First Talkie, *My Neighbor’s Wife and Mine* (1931),” International symposium Paris (France) THE SOUNDS OF EXOTICISM IN CINEMA (SOUNDS, MUSIC, SPEECHES), 2019年11月13～14日、IRCAV-Universite ▪ Sorbonne Nouvelle ソルボンヌ大学(パリ)。日本で最初にフルトーキーとして成功した『マダムと女房』の音の使い方、特にジャズについて。「雑音」が「音」となり、「音楽」(耳に心地よいもの、幸せな気分にするもの、更には生産的な気分を鼓舞するもの)となっていく過程を、日本のトーキー移行期の歴史的背景も交えて論じる。また、この映画制作時に音がどのように取り扱われたのかも同時に論じる。

#### 4. 今後の活動予定

上記の通り、まずは本の原稿を終わらせることが先決である。原稿が仕上がり次第、今回の本に収まりきらない研究成果を論文として出版することを検討したい。